

『つながる世界』～知ろう考えよう、世界と日本のこと～

2018年1月 国際交流・図書

2018（平成30）年を迎えた今、自分が『つながる世界』を書いているのはなぜかと考えると、30年前のオーストラリアへの留学がきっかけだったように思います。ちょうど昭和が平成に変わる頃、インターネットはまだありませんでしたが、留学先で出会った人々が様々な世界への扉を開いてくれました。そのおかげで、教員になってからも海外の教育現場に立ったり、国際援助の現場を訪ねたり、こういう文章を書くこともその延長線上にあります。

これまでのことから実感したのは「経験」と「学び」の大切さです。海外に出かけ人々と交流することは、異文化理解の大きな助けとなります。けれどもその経験をさらに深めるためには学ぶこと、特に歴史を学ぶことが不可欠です。なぜなら戦争や貧困そして文化的経済的繁栄まで、国際社会の諸事は歴史の積み重ねの上にあるからです。また、歴史やその見方は国や人によって時には違うことも感じたからです。

世界は多様で複雑で厄介です。しかし、それが世界の豊かさでもあります。今年、みなさんはどんな世界と出会うでしょうか。感じたことを手がかりに次の一步を踏み出してみてください。「本」はみなさんの好奇心や学びをいつも待っています。

いい意味での違和感 ～韓国の人々の心に触れる～

チョナン・カンを知っていますか。元SMA Pの草薙剛さんです。TV番組をきっかけに韓国語の勉強を始め、チョナン・カンとして活躍していたのは15年ほど前の話ですが、その草薙さんが翻訳した本を図書室で見つけました。

『月の街 山の街』は韓国の貧しい街を舞台に、実話を元に書かれた短編集です。草薙さんもあとがきで述べていますが、表現や内容に「いい意味での違和感」があります。見た目は日本人と変わらないのに、ニュースで見る韓国の人々に違和感を覚えたことはありませんか。そして「やはり国民性が違う」と思ったことはないでしょうか。私たちには大げさだったり突拍子もなく感じられる彼らの様子を、草薙さんは「いい意味での違和感」と表現し、「そこが韓国の魅力」とも述べています。

この本を読み始めてすぐに、小学校時代に読んだ『ユンボギの日記：あの空にも悲しみが』という本を思い出しました。やはり韓国の貧しい境遇に暮らす小学4年生の男の子の日記です。50年余りの前に書かれたものですが、久しぶりに読み直してみると『月の街 山の街』に通じる、人の誠実さと温かさが改めて感じられました。



違和感の背景をさぐる ～世界のタブーから考える～

みなさんの生活にタブー（禁止された事物や言動）はありますか。たとえば日本では、4や9の数字は避けられる傾向にあります。食べ物はどうでしょう。日本人にはあまり食べ物のタブーがありませんが、イスラム教徒が豚肉を食べないことはよく知られています。ではなぜ彼らは豚肉を食べないのでしょうか。

『世界のタブー』には、様々なタブーとその背景が解説されています。食べ物以外にも言葉や習慣、しぐさに至るまで、私たちの知らないタブーが世界にはあります。ある人々にとっては特に問題にならないことも文化が違えば違和感になり、やがて摩擦が生じる場合もあります。たとえば日本の捕鯨文化などがそうですね。

あるものを食べる文化と、食べることを禁忌する文化には、どちらにも文化的背景があります。歴史をさかのぼり背景をさぐることで、「食べる・食べない」といった表面的な違いを超えた、異文化の理解が可能になるのではないのでしょうか。

ところで、ドイツやオーストリアでは数字の「18」がタブーで、自動車のナンバープレートなどで選ぶことが、法律で禁止されているそうです。なぜだかわかりますか。ヒントは歴史とアルファベットです。



世界のいろいろな図書館 ～本は人と人、人と世界をつなぐ～

『世界の不思議な図書館』ではモダンな図書館に混じってラクダの移動図書館（モンゴル）や子ども図書館船（ラオス）など、ほのぼのした写真が目にとまります。どのような形や規模であれ、世界のあらゆる地域で図書館が求められるのは本には「つなぐ力」があるからです。

130カ国ほどの人が暮らす東京の新宿区に、20カ国近い言語の本をそろえた公立図書館があります。外国人の利用を促すため職員が地域に出て奮闘している様子がTV番組で紹介されていました。外国人にとって図書館は日本語の学習や地域との交流の他、母国語の本に触れる場としての役割も果たします。図書館は世界のアクセスポイントです。

さて、『つながる世界』も最終回。本を通して世界を知る、考えるという試みは、紙媒体よりデジタル媒体、じっくり読むより短時間で見て楽しめるものが好まれる今、少し地味だったかもしれません。それでも何かがみなさんの興味・関心につながり、そこから次のステップへつながっていくならば幸いです。（文責 武田）

